

地域交流活動の学習成果と獲得プロセスについて

－短期大学のキャリア・職業教育に関する一考－

Learning Outcomes and Meta-Learning Process of the Traditional Local Exchange Activities

－A Consideration related to Career and Vocational Education in the Junior College－

平田 孝治 桑原 雅臣 米倉 慶子

鍋島恵美子 福元 裕二

Koji HIRATA Masaomi KUWAHARA Keiko YONEKURA

Emiko NABESHIMA Yuji FUKUMOTO

【研究ノート】

地域交流活動の学習成果と獲得プロセスについて

－短期大学のキャリア・職業教育に関する一考－

Learning Outcomes and Meta-Learning Process of the Traditional Local Exchange Activities

－A Consideration related to Career and Vocational Education in the Junior College－

平田 孝治*¹ 桑原 雅臣*² 米倉 慶子*³
鍋島恵美子*⁴ 福元 裕二*⁵

Koji HIRATA Masaomi KUWAHARA Keiko YONEKURA
Emiko NABESHIMA Yuji FUKUMOTO

要旨 旧来より継続されている各種の地域交流活動について、学習論的特性を検討し、その教育的意義について考察した。西九州大学短期大学部の活動を事例として、活動の背景、目的やねらい、その学習成果について俯瞰したところ、地域交流活動は、人間関係性構築のメタ学習（知識の心的手続き）の機会となっていることが判断され、地域の人材育成を柱とする短期大学にとって、職業人材の育成の基礎となる社会人・家庭人（生活をともにする最小単位の一員）としての「人づくり」教育（情操教育）として、「他者の視点や状況から自分の役割に気付く」といった学習の場となっていることが考えられた。

キーワード 地域交流活動、人間教育、隠れたカリキュラム、メタ学習

1. はじめに

こんにち日本の少子高齢化、労働人口の減少、グローバル化といった社会背景¹⁾のもと、教育制度の見直しによって、高等教育には専門職大学・短期大学という新たな枠組み²⁾が設けられた。大学全入時代のなかで短期大学の67%が定員割れを生じる³⁾なか、短期大学の今後の在り方について議論の進展が求められている。⁴⁾とりわけ地域の人材育成を柱としてきた短期大学にとっては、地域との関わりに

おける議論の深化が求められている。これまで地域との結びつきが弱かった高等教育機関は、およそ2000年を境に地域への貢献・還元が交流型から産学官との連携型へと様相を変え、KPIやKGIを明確にするなど、特に連携事業として地域・産業界の課題解決に貢献する成果が強く求められるようになった（伊藤・小松2006，文部科学省2017）。⁵⁾

短期大学教育において、私学はそれぞれの建学の精神に基づいた地域人材の育成を柱に、所在地域との交流の場を設けた教育が、比較的多く取り入れ実践されてきたことは周知のとおりである（文部科学省2011）。短期大学は、時代とともに教育課程を変遷させるなかで、学生の地域との交流の場として、大学祭や成果発表会、サロン活動、ボランティア等を含める正課内外の教育活動など、伝統的に引き継がれている地域との交流活動が、こんにちにおいても少なからずある（文部科学省2011）。けれども、現在にお

* 著者紹介

*¹ 西九州大学短期大学部地域生活支援学科教授

e-mail: hirata@nisikyu-u.ac.jp

*² 西九州大学短期大学部地域生活支援学科教授・学科長（食生活支援コース主任）

*³ 西九州大学短期大学部幼児保育学科教授・学科長

*⁴ 西九州大学短期大学部地域生活支援学科教授（福祉生活支援コース主任）

*⁵ 西九州大学短期大学部学長

〒840-0806 佐賀県佐賀市神園三丁目18-15

Tel: 0952-31-3001（代表）

いては、旧来より引き継がれる地域との交流活動（以下、地域交流活動と称する。）⁶⁾がどの程度なされているものか、具体的な調査はなされていない。稲永・吉本（2017）が、短期大学教員の地域への貢献・還元への志向性が、大学・専門学校と比較して高いことを指摘しているように、教員は、短期大学教育にとって（特性として）地域への貢献・還元的な活動が、2年間という比較的短い修学期間のなかで、短大生の自律性を促すために、経験的に必要な教育要素であろうことを、意図的あるいは暗黙的に理解していることを示すものとも考えられる。こんにち急速に変容する社会背景と世界的な教育改革の潮流において、地域交流活動は坦々たる草の根的な活動として見過ごされがちであり、また実際の地域貢献活動におけるメタ認知学習の分類学的考察はない。

本論では、上述の課題を論点として、継続されている地域交流活動の教育的意義を改めて明らかにしたい。そこで、西九州大学短期大学部の地域交流活動を事例として取り上げ、それぞれの教育上のねらいや学習成果を簡潔にまとめ、その学習について整理する。そして、これらを俯瞰して捉えられる短期大学教育の地域交流活動におよそ共通するであろう学習論的特性について一考する。

2. 地域交流活動とその意義⁷⁾

2.1 地域交流活動導入の経緯

西九州大学短期大学部は、佐賀地方において戦後間もない当時社会の「平和運動」、「食生活改善」や「女性の解放」を背景に、佐賀栄養専門学院の設立（昭和21年）に始まり、各専門学校の開設を経て佐賀短期大学（現：西九州大学短期大学部）の開設（昭和38年）に至っている。教育の理念には、「あすなろう」⁸⁾が掲げられている。これにはパッション・創意工夫・師弟同行・生涯学習の、教育に対する4つの信条も込められている。このことは、教育の理念が第一義的に教職員に向けられていることが分かる。地域交流活動は、当学園草創期からの学習成果物の品評会や販売、実技・表現の発表会、そして地域住民との親交を目的とした「月見の宴」などに始まっている。前者は、職業教育訓練の一環として、正課内外の学校行事に始まり、学科専門分野の特色に応じた地域交流活動が定着するものとなった。後者は、佐賀短期大学健康福祉・生涯学習センターが1994年に設置されて以来、エルダーカレッジや公開講

座等の地域住民の学びの場として発展し、また地域住民との交流を取り入れた、学生の学習活動の場としても機能するものとなった。

当学園創設者である永原（1966）は当時、家事及び民事の調停委員、参与委員としての経験に基づいて、単的表現によって理想の人間像についてまとめている。⁹⁾この理想の人間像については、「学生は一度実習場の学校、病院、幼稚園、保育所等々社会に出ればわずか数週間にして人間関係の困難であることを第一印象として自覚して来る。そこに成長がある。自分の人間像を見直す域に達したその自省自誠の時期に与えたい「ケースに現われたる人間像」である。」と述べている。そこでは、「個人として」理想の人間像に加えて当時の「家庭人として」理想の人間像¹⁰⁾を同様にまとめており、佐賀地方の実社会における理想の社会人・職業人・家庭人としての、「人づくり」という人間教育の重要性を指摘している。そこには、「2年間という短い学生生活において、如何にして複雑な社会で生き抜く力を育てるか」、現在と共通する課題が取り上げられており、職業教育訓練の一環として取り入れられた地域交流活動が、専門分野の実習等を補完するなかで、現実社会で生きていくための情操教育の一つの場としても位置付けられてきたことが考えられる。

2.2 地域交流活動について

西九州大学短期大学部の各学科・コースのなかで、伝統的に実施されている地域交流活動のいくつかについて、簡潔にまとめる。

「おせち料理&デコレーションケーキフェスティバル」

食物栄養学科（現：地域生活支援学科食生活支援コース・多文化生活支援コース）が年1回開催しているもので、1946年創立（昭和21年）当初からの学校行事「サラダ会」として始まるパーティーテーブルの展示・品評会と、デコレーションケーキ品評会・即売に始まり、2017年度で第71回となる。この行事は、当コース主催で行われるものの、今も学校行事として教職員が運営に参加している。現在の活動目的及び主なねらいは、次のとおり示されている。¹¹⁾

（活動の目的）

授業の成果を公開するとともに地域の方々と学びあう地域参

加型大会とする。デコレーションケーキは展示後、チャリティー即売を行い社会福祉に貢献する。

(活動の主なねらい)

伝統行事の理解を通じた専門職への意識づけ
体験による自信・充実感と感動の体験
おもてなしの心
地域貢献

現在の主な活動内容としては、技能成果の公表の場として、2年生はおせち料理、1年生はデコレーションケーキの製作を行っている。フェスティバル当日は、設営準備、会場案内を含めた接客対応、ぜんざいを振る舞うなどのおもてなしを行う。作品はその説明要旨と合わせて品評会の学内外評価を受け、各表彰される。品評会の審査基準は、独創性・技術・衛生(清潔感)が挙げられている。(学校法人永原学園1996, 西岡ほか2012)。活動の記録は、毎年の作品集¹¹⁾として編集され、製作資料として活用されている。ケーキのチャリティー即売では、毎回完売するなど、地域住民の関心は今も高いと言える。おせち料理では、伝統料理の理解と合わせて、各家庭のおせち料理を知るなどの、家庭人として理想の人間像に向けた活動も含まれている。「おせち料理大会」については、参加学生の98%以上が、この実践が将来栄養士を目指す者にとって必要・重要であることを「強く思う」あるいは「やや思う」と回答を得るなど、ねらいに対する学習成果の一端を報告している(西岡ほか2012)。

「表現フェスタ」「親子いきいき広場」

「表現フェスタ」「親子いきいき広場」は、幼児保育学科が主催する地域交流活動として継続されている活動である。前者は、1973年(昭和48年)当初「音楽会」の実技発表に始まり、2013年に西九州大学グループとして拡大開催されるものとなり、現在は大学・短大・附属幼稚園・保育園、そして器楽サークル等が参加する学園行事となっている。後者は、2004年から本学の「子育て支援」の取組みとして始まった活動で、地域の乳・幼児を主とする親子を対象にふれ合い活動を行うものである。

これらの活動については、当時の愛情(人格形成に対する感情)・才能(人間形成に携わる才能)・性格(自分を合わせていく性格)・意思(育てようとする意志)に対する一体的育成のなかで、保育実践力の育成と豊かな人間性の涵養が目的として示されていた。現在の活動目的及び主なねらいは、次のとおり示されている(林ほか2008, 田村

ほか2008)。

(「表現フェスタ」の目的)

音楽活動を通して音楽性と人間性の高揚を図る。

(「表現フェスタ」の主なねらい)

舞台発表(地域貢献)
演奏・表現技術の向上と創意工夫
コミュニケーション力
実践方法の理解
実務経験

(「親子いきいき広場」の目的)

使命感・責任感、教育的愛情

社会性、対人関係力

幼児理解や学級経営等に関する能力

教科・保育内容等の指導力

(「親子いきいき広場」の主なねらい)

傾聴力、理解や協力を得て課題に取り組む

保護者や地域との連携・協力の重要性への理解

集団のなかで、他者と共同して運営・展開する

集団のなかで、率先して取り組む

子どもたちの発達段階に応じた接し方

親しみ

子どもの声を真摯に受け止め、公平で受容的な態度で接する
社会人としての規範

「表現フェスタ」での主な活動内容としては、音楽・表現コース1・2年生が主体となり、器楽アンサンブルやミュージカルを公演するもので、選曲や台本作成、編曲、大道具・小道具や衣装も手作りで仕上げている。器楽アンサンブルでは演奏だけでなく、会場と一緒にダンスやリズム遊びなどの演出を含み、ミュージカルは器楽のBGMと合わせた表現演出がなされているほか、当日は会場設営、接客・誘導係り、駐車場係りなどの運営にも携わっている。過去に発表されてきた演目には、この他にダンス劇、オペレッタ、独奏、合奏、連弾、独唱、合唱、かたりべなど多岐にわたっている。「親子いきいき広場」では、心理・環境コースの学生が主体となり、年間を通して参加親子を担当し、子どもたちとの遊びの企画・実施、保護者への対応・会話など、保育や子育て支援の実践を毎月1回行っている。

「表現フェスタ」について、林ほか(2008)は、演奏・表現技術の向上と創意工夫等、学生が主体的に活動する意欲が引き出していること、同じ目標に対して他者との意思疎通を図るための行動や在り方への気づき、実践研究方法の理解、行事にかかわる保育者の実務経験として、学習成果の一端を報告している。「親子いきいき広場」について、田村ほか(2008)は、学生・保護者へのアンケート調査から、学生の保育観・意識や、児童福祉援助技術や家庭援

助技術などの保育技能等が年間を通して向上していることを報告している。この活動を通じて学生たちは、子どもや保護者との関わりを大切にすること、子どもや保護者の立場に立ち思いやりの気持ちを持つこと、自他の活動を批判的に検討し、卒直な意見交換を行うことなど、ねらいに対する学習成果の一端を報告している。

「遊友広場」「生きがいつくり教室」

「遊友広場」「生きがいつくり教室」は、生活福祉学科(現：地域生活支援学科福祉生活支援コース)が主催する地域交流活動として旧来より継続されている活動である。前者は2001年の「大きくなーれ 友だちの輪」として始まり、県内の小規模作業所・施設の職員・障がい者と、介護・福祉に関心を持つ高校生を招き、学生が主体となってレクリエーションやゲーム等を企画・運営するふれ合い活動を毎年1回行っている。後者は、当健康福祉・生涯学習センターの開設時に、地域高齢者の生きがいや健康増進を図ることを目的に始まり、学生が主体となってレクリエーション活動を企画・運営する体験学習を毎週1回行っている。これらの活動に対しては、当時の知識・技能・心・健康・誠実に対する一体的育成を行う教育的思想のなかで、援助のスキルと自己効力感、利他性、価値観や意識の高揚を図るねらいが示されていた。現在の活動目的及び主なねらいは、次のとおり示されている。

(活動の目的及び主なねらい)

福祉の心や人間関係の理解を育む。
主体的活動を通して企画力や運営力を身につける。
リーダーシップ能力を育成する。
チームワークの重要性を学ぶ。
障がい者／高齢者の対応の仕方・対人援助法を学ぶ。
成し遂げた時の達成感・充実感を味わう。
地域貢献活動の一環として位置づける。

現在の主な活動内容としては、障がい者あるいは高齢者との交流の場において、レクリエーションやゲームを考案・企画し、実際に運営を行っている。「遊友広場」「生きがいつくり教室」では、学生の感想から、達成感・充実感の体験、福祉職としての職業意識形成につながる思い、交流に対する新しい認識(共同)、障がい者や高齢者に対する理解の深化、2年生のイベントを先導する意識の確立、役割を果たすことに伴う充実感(チームワーク)、自己認識の深化(コミュニケーションの大切さ、マナー、意欲と

自信、自己価値観など)、そして交流活動自体への感動が得られていることが報告されている(高尾2006, 鍋島ほか2013)。「遊友広場」については、学生間のコミュニケーションに対して74%の学生が「役に立った」と回答を得るなど、ねらいに対する学習成果の一端を報告している(鍋島ほか2013)。

2.3 地域交流活動の学習について

各学科の地域交流活動は、上述のとおり、各学科の専門職業人の育成のなかで、教育上の目的やねらいが示され、その学習成果の一端を、態度・知識・技能表現・行動の観察やアンケート調査の記録等から見出されてきた。しかしながら、それぞれの地域交流活動に対しては、多くが学習論的理解や教育目標の分類学的整理が十分なされなかったため、その教育効果や学習成果は断片的なものといえ、いわゆる「隠れたカリキュラム」として少なからず実践されてきたものと考えられる(Snyder 1970, 平田ほか2017)。

学習論的観点から、活動の背景、目的やねらい、その学習成果を総合的に判断したところ、地域交流活動の教育効果(学習成果)は、大別して①専門職・個人(社会人)としての認識・理解の向上、②専門職に求められる知識・技能の応用・創造力、③地域貢献に対する実践的理解の、3つの共通点が見出せた。これらの成果を獲得するために、学生は如何なる学習プロセスを踏むかについて、マルザーノ・ケンドール(2013=2007)の新しい教育目標の分類体系を主な参考としながら検討を行った。活動事例に見出されたねらいや学習成果、そして学生の心理的手続きを活動形態別に整理し、メタ学習プロセスとの主たる相関を検討した。その結果を図1の模式図に示す。学習の次元(知識の領域)に対するメタ学習プロセスには、図(下線部)に示すように、主に3つに区分される心理のプロセスがあることが考えられた。

学生は、上述した3点の学習成果の獲得において、「選択能力・モチベーション」から「自己システム化」への段階的な認知的学習プロセスを経るものと考えられた。これらの認知的プロセスは明確な境界区別があるものではなく、活動の一場面なかで、あるいは活動全体を通じた、「自己システム化」へのさまざまな後退を含む複雑な漸進過程とされる(倉石ほか1987)。地域交流活動は、地域連携活動

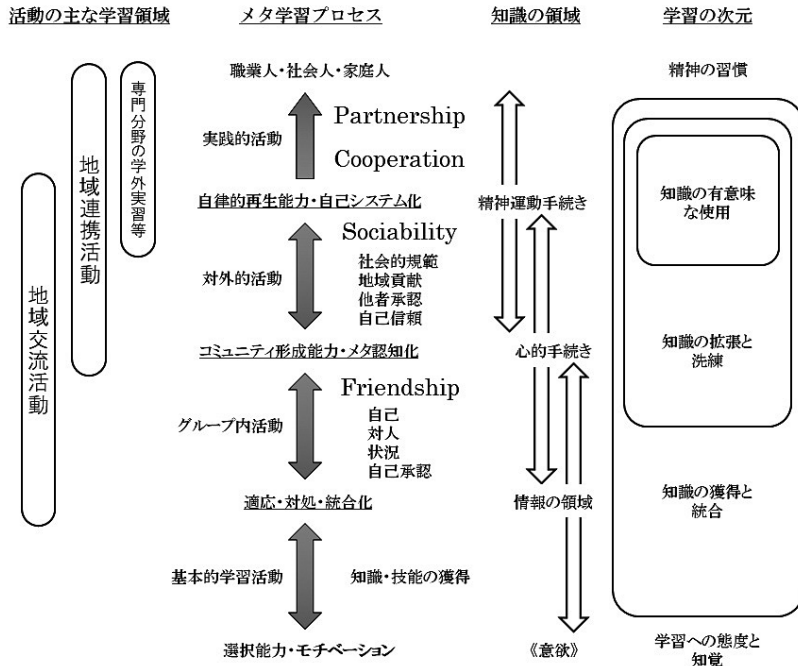


図1 対外的活動の「教育目標の分類学」との相関

「新しい教育目標の分類体系」(マルザーノ・ケンドール2013=2007)並びに「学習の次元(マルザーノ1992)」(石井2011)を参考に筆者がアレンジして作成した。英語表記は、メタ学習プロセスのなかでパフォーマンスの発達に係る人間関係性の範囲と深さを表現している。

や専門分野の実習等の実践的活動とは異なり、「コミュニティ形成能力・メタ認知化」を中心とした、知識の拡張と洗練に向けた「心的手続き」を主とする学習ステップを重視していることが考えられた。実際には、グループ内活動における学生の内的変化を直接測ることは困難であるが、いずれの地域交流活動の調査からは、事前・当日・事後のグループ活動や交流の場において、専門職に係る知識・技能・表現の応用、そして対応力のもとより、協同とそこでのコミュニケーション力や役割等への理解が深められていることが示されている。

またこれら事例の活動については、内容それぞれに異なるなかで、共通して言える点は、活動の達成に向けて学生・教員が一丸となって取り組む点にある。そこで、地域交流活動の学生と教員との関与について検討した。図2に示す

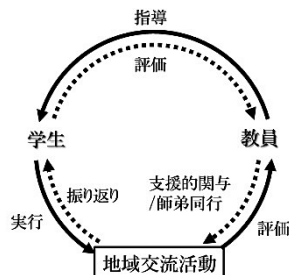


図2 地域交流活動における教員の関与

ように、従来の授業や専門分野の実習等においては、およそ実線に示す左回りの関係性が示されるが、地域交流活動では従来の指導と評価はありながら、活動に対する支援的関与(あるいは師弟同行)と学生自身の変化(振り返り後の学生に対する評価)に対する右回りの隠れたカリキュラムが含まれている。地域連携活動は、これと同様の関係性が見出されるが、認知学習プロセスの自己システム化(知識の精神運動手続き)を中心に置く点で異なっており、専門分野の実習等の活動に近いものと考えられる(図1)。過去の地域交流活動においては、学生の変化を教員それぞれが観取し、把握してきたものと考えられるが、学習のねらいに対する評価指標等は十分明確にされてこなかったと言える。地域交流活動に対しては、マルザーノ・ケンドール(2013=

2007)が示すように、知識の領域に対する認知学習レベルに対応した教育目標を設計することで、地域課題の解決に向けた取組みなど、高次の学習レベルを含めた活動の設計に繋がることが期待される(石井2011)。

一方、産学官との連携に基づく地域連携事業は、雇用創出や産業振興等の実社会に対する成果が要求される。事例紹介した地域交流活動の過去の記録においては、活動風景や作品の画像が殆どを占めている。これらの教育的意義や学習成果等については、論文等での記載は限られており、教育現場で感じ取られてきたものと考えられる。地域住民との交流活動は、協定書等を必要としない草の根的な活動として、地方の人づくりとしても見えにくい成果と言え、ステークホルダーに対する成果検証に課題が残される。

短大教育では、人材育成の基盤となる人間教育(情操教育)が、大学・専門学校よりも重視され、教育上経験的に導入されてきたものと推察される。一般に短期大学では、人との接し方や物事を進めていく方法が分からない学生や、入学当初は自己肯定感が低い学生が比較的多いと言われている。^{12,13)} その様な教育・指導の現状において、地域交流活動では、先ず自己・対人・状況それぞれに対する適応・対処・統合化、自己承認のステップから、コミュニティ形成力・メタ認知化へと深化を図る場となり、そして社会的

規範・地域貢献を知るなかで、他者承認・自己信頼を獲得するための基礎的な社交性を身に付けていくまでの認知プロセスを有するものと考えられる(図1)。教育改革の世界的潮流においては、「21世紀型能力」の育成が求められている(ファデルほか2016=2015)。そこには、知識・スキル・人間性・メタ学習(Metacognition: the process of thinking about thinking と Growth Mindset: the inner belief that abilities can be developed through hard work)の4つの次元が示されており、地域交流活動はこれらの総合的学習にとって有効であると判断される。

地域貢献の主流となっている地域連携活動は、その性格上、連携先に貢献する成果を求めるところであり、学生の適応・対処・統合化の教育(学習成果)が主な目的とされていない(既に獲得されたものとして連携事業の成果を求めるものと考えられる)。西九州大学短期大学部においては、家庭人として、地域に根付く人づくりを、地域交流活動が一つの場となり、職業人・社会人(個人)としての専門職業教育に合わせて実施されてきたと考えられる。以上のことから、地域交流活動は、下位の学習プロセスを踏まえた、学生個人から社会人・職業人・家庭人に向けた「人づくり」教育にとって、有効な場となってきたと考えられる。短期大学では、比較的地域交流活動を多く取り入れていることは、「他者の視点や状況から自分の役割に気付く」といった、人格形成の育成(知識の心的手続きの学習)を重視しているものと考えられる。

3. 地域交流活動から地域貢献活動へ

政府は「新しい経済施策パッケージ」を打ち出し(平成29年12月8日閣議決定)、大学には急速に変わりゆく社会で活躍できる人材を育成するため、社会ニーズや産業界ニーズも踏まえた、より実践的な教育を求めている。地域貢献活動には、学生の教育を主とする地域交流活動から、産業振興・専門職人材育成を目的とした研究を主とする地域連携活動(地域・産業界の課題の解決に向けた連携事業)など、活動内容も様々にあるなかで、今後の地域貢献活動は教員主導の研究成果を第一とする活動に偏ることが懸念される(伊藤・小松2006)。このことは、研究型活動に傾倒する大学・教員(当該専門分野の教員と、これに属する一部の学生)には、産業界・地方公共団体間の連携事業のなかで、協力・支援を得る点や属人的専門性が活かさ

れる点では都合がよい。一方で事業目標の達成(地域・連携先にとって有益な成果)を先行するが故に、その素養として必要なメタ認知レベルは、学生に対して既に獲得されたものとしておざりな対応となることが懸念される。¹²⁾

社会人・職業人の育成は、専門性の程度は違えど高等教育機関・専門学校種に基本的に共通するが、その素養として「地方の良き個人(社会人)・家庭人として」の「人づくり」教育の思想は、短期大学教育の原点的特長といえ、(地域の雇用創出や課題解決、専門職人材育成の前提あるいは同等の課題として、)卒業後の地域への定着、リカレント教育や生涯学習、学びのセイフティーネットなどの機能にもつながる基盤的思想として、今後の短期大学の在り方や日本版コミュニティ・カレッジの構想に対してヒントを与えるものと考えられる。

現在、西九州大学短期大学部では、様々な地域貢献活動がカリキュラムに組み込まれ展開されている。いくつかの活動については、学生の学習成果の成果検証を行い、活動の教育的効果について考察がなされている。一方では、地域貢献活動に限らないが、メタ学習を踏まえた学習プログラムとしては整理されておらず、試行錯誤の段階と言える。今後の地域貢献活動をより効果的に展開するためには、従来の認識を超えた学生本位・教育重視・地域重視の視点(伊藤・小松2006)、そして「人づくり」教育の基盤となるメタ学習プロセスを踏まえたプログラム設計が求められるよう。

謝 辞

本研究をまとめるにあたり、JCKK 研究センターのセンター長吉本圭一氏(九州大学教授)、同センター研究員の伊藤友子氏(熊本学園大学教授)・稲永由紀氏(筑波大学講師)ほか、JCKK 加盟校の委員の先生方から有意義なご助言・意見等をいただいたことを感謝申し上げます。

注

- 1) 少子高齢化に伴う労働人口の減少や、都市圏人口の一極集中化による地方の超少子高齢化が進んでおり、地方経済はもとより国力の衰退が加速することが懸念されている。平成28年4月1日「ひと・まち・しごと創生法」が施行されるなかで、高等教育機関には、地方創生に資する大学として、地域の産業振興・専門職業人材の育成に向けた機能強化が求められるものとなった。
- 2) 社会が複雑・多様化し、職業の在り方や働き方も大きく様変わりする中で、政府は職業の専門性を重視する専門職大学及び

- 専門職短期大学を制度化（平成29年法律第41号）し、平成31年4月1日から施行するものとなった。
- 3) 日本私立学校・共済事業団私学経営情報センター「平成29（2017）年度私立大学・短期大学等入学志願動向」（平成29年8月）による。
- 4) 中央教育審議会大学分科会大学教育部会短期大学ワーキンググループ「短期大学の今後の在り方について（審議まとめ）」（平成26年8月6日）に示される短期大学における機能別分化の推進事項について、九州大学・教授吉本圭一氏（JCCK 研究センター長）は、具体的特長を示す必要性を指摘している。
- 5) 文部科学省は、「私立大学等改革総合支援事業」において、地方における大学等との特色化・資源集中を促し、複数大学間の連携、自治体・産業界等との連携を進めるためのプラットフォーム形成を通じた大学改革の推進を支援する、(タイプ5)「プラットフォーム形成」事業を平成29年度に新設した。
- 6) 伊藤ほか（2006, 2007）は、地域貢献活動には、様々な種別類型があるなかで、大学と地域の間には、「信頼し合える関係、刺激・触発し合える関係、学び合える関係、支援・援助し合える関係、創造性・付加価値を付与し合える関係」という相互依存・相互貢献の連帯関係を築くことが目標となることを述べている。本論では、継続性のある組織的な活動であり、学生・教職員・地域住民が、それぞれの立場で参加する教育主体の交流活動を「地域交流活動」と称する。一方、自治体・産業界等に有益な成果を与える活動を「地域連携活動」と称し、「地域交流活動」と区別する。地域交流活動は、主に地域との信頼関係を築く教育重視の活動と捉えられる。
- 7) 参考文献のほかに、次の資料や本学ホームページ掲載情報、教員インタビューをもとにまとめた。
学校法人永原学園（1996）『永原学園創立五十周年記念誌』第一法規出版。
学校法人永原学園（2016）『学校法人永原学園創立70周年記念誌～地域とともに、未来へ、世界へ～』昭和堂。
- 8) ‘あすなろ’は、翌檜（アスナロ）の木を指し、長い年月をかけて檜（ヒノキ）のような大木に成長する常緑の高木である。「あすなろう」とは、今は小さな苗木でも、あす（翌日の翌、明日）はひのき（檜）のように「大地にしっかりと根をおろし、亭亭とそびえ、馥郁と香りを放つ」大木になろうという願いを込めた言葉で、創立以来、本学園の教育理念となっている（学校法人永原学園2016）。⁹⁾
- 9) 永原（1966）がまとめた理想の人間像は次の通り示されている。この理想像は、概ね今日の社会にも当てはまる現実的なものと言えよう。

理想の人間像 (Ideal personality)

一人として—

①自主性 (Autonomous) — (個人の尊厳)

- 1 (イ)自律的 (Independent) (ロ)中立し独立している
- 2 正しい (イ)判断力 (Judgement) (ロ)思慮有り (ハ)深い
- 3 責任感 (Responsibility) (イ)強い (ロ)ある (ハ)みえる
- 4 正しい権利 (Right) は主張する 寛容である
- 5 (イ)義務 (Duty) を守る (ロ)義理を重んずる
- 6 (イ)勇気 (Courageous) があり勇敢
(ロ)正しいきびきびした言語動作
- 7 (イ)宗教心 (Religious) (ロ)信仰家 (ハ)条理をたてる
- 8 (イ)継続性がある
(ロ)確固たる信念 (Strong faith) に生きる
- 9 相手の立場を考えてみる余裕
- 10 常に笑顔 (Smile)

②正しく人を愛する人

- 1 誰にも親切 (Kind) やさしい
- 2 (イ)親 (父, 母) 尊敬 (Respect) する, 愛する
(ロ)同居 (ハ)別居
- 3 祖父母, 祖先の祭り 資産相続
- 4 夫婦の愛情 (Conjugal affection) 細やかさ

- 5 兄弟姉妹との親交
- 6 友情 (Friendship) が多い 少ないが親交がある
- 7 近所交際 (Acquaintance) よく世話をする, 子供を可愛がる

理想の人間像の分析

③個性を伸ばす (Personality)

- 1 勤勉 (Diligence) で努力型 着実 (Steady)
 - 2 個性は伸び伸びしている (Free)
 - 3 根気 (Patient) 強く まげず嫌い
 - 4 才能 (Ability) 素質がある 手腕がある
 - 5 人間性の開発—家庭の中心になっている
 - 6 人間性の開発—社会をリードしている
 - 7 教養 生活感情の尊重される程度
 - 8 愛好するもの 読書 文芸 園芸 登山 写真
スポーツ 書道 旅行 工作 絵画
華道 茶道 遊芸 貯蓄 釣り 音楽 (和・洋) 名誉心
 - 9 資産 (富裕・中産)
- ④個人としてのもししい人 態度
- 1 紳士の態度 女性らしい態度
 - 2 健康 明朗性 (Brightness) 社交性
 - 3 (イ)親しみ易い (ロ)厳正な態度
 - 4 服装 正しい 清潔感
 - 5 和して動じない人
 - 6 思想健全 忍耐
 - 7 他人の悲しみを己の悲しみとする 喜びを己の喜びとする
 - 8 (イ)意思の人 (ロ)愛情の深さ (ハ)実行にうつす人

⑤建設的な人間 幸福な人間

- 1 常に明朗 活動力にみちている
- 2 定職に専念している 恩給—生活安定
- 3 文化促進に献げている
- 4 生産的 貯蓄的 創造 企画的 希望に向って輝いている

— 一家庭人として (A member of family) — (項目のみ抜粋)

- ①夫婦間の調整— 文化的背景 行動特性
 - ②開かれたる家庭 善良な市民 家の子どもにも
 - ③家庭は憩いの場所 解放感と喜び
 - ④教育の場— 指導性
- 10) 家庭人とは、本来「(職業人・会社人間に対し、) 夫・父親として、妻や子供との生活を楽しみ大事にする男性をいう」(『デジタル大辞泉第二版』小学館)。永原（1966）が称える、家庭人として理想の人間像は、将来佐賀地方に暮らしていく家族の一員として考慮すべき事項が示されている。そこには、宗教、教養、家族構成、職業、社会的地位、経済状態、健康状態、親愛の情、生活態度、性格、慣習、習慣、趣味など、当時の社会・文化的背景を踏まえた項目が多岐にわたり照会されている。また、個人として理想の人間像よりも多く紙面が割かれており、佐賀地方に根付く家庭人としての人づくりを重要視していることが窺える。
- 11) 調理実習担当編「*** “もてなしの心”」作品・記録集、西九州大学短期大学部食物栄養学科（現：地域生活支援学科食生活支援コース）を毎年度発行している。（*：各年度に決められたテーマが記載される。）
- 12) 全私学新聞記事（平成29年12月13日号）「日協協私立短期大学学生生活指導担当者研修会」を参考にした。
- 13) 地域連携活動や専門の学外実習等には、学生の社交性やコミュニケーションの能力が求められる。社交性などの対人関係を図る能力は、自己肯定感や自己効力感等の自己意識が基盤的条件となっている。人格の成熟過程における自己意識は、主体と環境との相互調和的な発展的なかかわり合いを展開（成熟・適応）するための重要な機能であり、成長過程における段階的なレディネスが求められる（倉石ほか1987）。女子学生の自己意

識は若干否定的であること（平石1990, 小林2002）、短期大学の女子学生が占める割合は比較的高いこと、本論で示した永原（1966）が述べていることなどを踏まえれば、地域連携活動や専門の学外実習等では見出しにくい、地域交流活動に含まれる自己肯定感等を育成する社会的適応（認知的発達）プロセスは段階的なレディネスとして重要と考えられる。

参考文献

- 石井英真(2011)『現代アメリカにおける学力形成論—スタンダードに基づくカリキュラムの設計』東信堂.
- 伊藤真知子・小松隆二編著(2006)『大学地域論—大学まちづくりの理論と実践』論創社, p3-44.
- 伊藤真知子・大歳恒彦・小松隆二編著(2007)『大学地域論のフロンティア—大学まちづくりの展開』論創社, p3-63.
- 石平賢二(1991)「青年期における自己意識の発達に関する研究(I) —自己肯定性次元と自己安定性次元の検討—」名古屋大学教育学部紀要, 教育心理学科37, 217-234.
- 稲永由紀・吉本圭一(2017)「『コミュニティ・カレッジ』へのアイデンティティの形成と拡散—短大教員の地域・職業への志向性に焦点をあてて—」短期大学コンソーシアム九州紀要『短期高等教育研究』Vol. 7, 5-15.
- 倉石精一ほか編著(1987)『教育心理学改訂版』新曜社, p10-48, 176-200.
- 小林知博(2002)「自己・他者評価におけるポジティブ・ネガティブ視と社会的適応」大阪大学対人社会心理学研究, 2, 35-43.
- 高尾兼利(2006)「『大きくなーれ 友だちの輪』の変遷とその意義について」西九州大学・西九州大学短期大学部紀要, No. 36, 163-167.
- 田村滋男ほか(2008)「保育者を目指す学生と子育て支援—「親子いきいき広場」の教育効果—」西九州大学短期大学部紀要, No. 38, 167-165.
- 永原マツヨ(1966)「人間像」佐賀短期大学紀要, 第1号, 1-17.
- 鍋島恵美子(2016)「介護人材育成講座(第149回)介護福祉士養成教育の現状と課題: 地域に求められる介護福祉士養成を目指して」地域ケアリング, Vol. 18, No. 1, 45-50.
- 鍋島恵美子ほか(2013)「体験学習を通じた教育方法に関する一考察」西九州大学短期大学部紀要, No. 43, 75-83.
- 西岡征子ほか(2012)「学校行事おせち料理大会についての一考察」西九州大学短期大学部紀要, No. 42, 77-84.
- 林洋子ほか(2008)「表現活動の実践力育成に向けての取り組み—実技発表会の開催を通して—」西九州大学短期大学部紀要, No. 38, 155-166.
- 平田孝治ほか(2017)「短期高等教育のキャリア・職業教育に関する一考—実践的活動事例からみる諸能力育成について—」短期大学—コンソーシアム九州紀要『短期高等教育研究』Vol. 7, 17-26.
- 文部科学省(2011)「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」中央教育審議会.
- 文部科学省(2017)「今後の高等教育の将来像の提示に向けた論点整理」中央教育審議会大学分科会将来構想部会(平成29年12月28日).
- C. ファデル・M. ピアリック・B. トリリング著, 岸学監訳(2016)『21世紀の学習者と教育の4つの次元—知識, スキル, 人間性, そしてメタ学習—』北大路書房. (= C. Fadel, M. Bialik, and B. Trilling (2015) *Four-Dimensional Education: The Competencies Learners Need to Succeed*, Center for Curriculum Redesign.)
- R.J. マルザーノ・J.S. ケンドール著, 黒上晴夫・泰山裕訳(2013)『教育目標をデザインする授業設計のための新しい分類学』北大路書房. (= R.J. Marzano & J.S. Kendall (2007) *The New Taxonomy of Educational Objectives, 2nd Edition*, Corwin Press.)
- B.R. Snyder (1970), *The hidden curriculum*, The MIT Press.